

大陸（満州）

今も心に、赤い夕日の満州が

兵庫県 岩城秀夫

私は、昭和十年徴集の現役兵として、満州・北支で三年軍務に服しました。

出征当時は、両親と姉一人、弟三人、妹二人の九人家族でした。家業は古物商（骨董品や衣服類）でした。当時としては、まあまあので、家族全員健康で、何一つ不自由のない生活状態でした。

私は砂利運搬船に乗っていました。地元の千種川の河原で採取した砂利を小舟で運んで親船に一杯積み込み、姫路や神戸に運び、特定の業者を受け渡ししてい

ました。これが大都会の基礎となり、ビルディングや道路交通網の土台になるのだ。大建設の一端の役割を担っているのだ、男として有意義な仕事だと、毎日一生懸命働いていました。

兵役の義務で徴兵検査を受け、甲種合格となりました。昭和十一年三月三日に「関東軍第三独立守備隊に入隊せよ」の命令書が来ました。二月二十四日、大勢の見送りを受けて播州赤穂の駅より出発しました。母親は柱の陰からじっと、私を見送ってくれました。「万歳、万歳」の声が一段と高鳴った汽車の汽笛の音が今も耳にあります。

広島の集合場所は市の管理する建物でした。我々第三独立守備歩兵第十七大隊の四個中隊要員、約四百人が集合しました。そこには我々を引率する准尉を長に

各中隊より下士官が待ち受けていました。諸説明があり、順次身体検査が始まる。私は第二中隊で隊員は約百名である。不幸にもその内の二名が即日帰郷を命ぜられた。二人は故郷出発時には盛大な見送りを受けたのと思えば気の毒なようだ。涙を流して別れました。

その夜は指揮官の指示で旅館に分宿しました。翌日は前日の会場に集合し、軍服が支給されました(まだ入隊前であるためか肩章はない)。各中隊指揮官に先導されて呉港に向かう。二月二十六日午後一時頃、沢山の見送りを受け、輸送船に乗船。出港を告げる汽笛がボーボーと悲しげに鳴る。中には涙ぐんでいた者もいました。

瀬戸内海は穏やかだったが、玄界灘へ出ると冬の海は大荒れで、波風の上に濃霧が発生し、霧笛を鳴らしながらの航海だった(多くの戦友が船酔いで苦しんだ)。

大連に無事入港上陸しました。列車の関係で民家に一泊、翌早朝軍用列車に乗せられ、平有線開通に向かって出発しました。途中何度か駅に停車し、民間人

から湯茶の接待を受けました。

三月三日午前一時頃開通駅に到着、下車して驚いた。三月でも夜中の満州の寒さの厳しさです。駅頭には各班長や初年兵教育係の上等兵が迎えに来て下さっていました。各班ごとに班長の指揮で兵営に向かった。到着した兵舎には薄暗いランプの灯が一つだった。「第三班はここだ、貴様の寝台はここだ」といわれ、ぎっしり詰まった寝台と枕元の棚は「貴様の品物を置く所だ(第一・第二・第三整頓棚)」「また、班の出入には必ず官姓名をいうのだ。勿論、行く先と用件をだ」といわれた。

少し眠ったと思ったら、起床ラッパが鳴り響いた。初年兵係上等兵の指導で朝食を取って、全員営庭に整列、中隊長の訓示を受けた。「本日よりお前達は帝国軍人として、国に奉公することになった。軍人勸諭を何時も頭に置き、日夜勤務に励め。また現地住民には絶対迷惑を掛けるな」と厳しく注意された。

兵舎内にて各人に軍服など種々のものが支給された。兵器から背囊等、すべての物を定位置に整理整頓し、

銃剣の手法等々目の廻る忙しき。その上に管内の諸施設の説明も詳しく教えられました。特筆すべきは、夕食に赤飯に尾頭付の鯛が出たことだった。

明けて三月四日からは厳しい初年兵教育に入る。我が班の教育係助教は二年兵の中隊一番の上等兵で、同助手も二年兵の強者上等兵である。それから一期の検閲の終わるまで一寸の休みもなく身体を動かし、頭は全回転させて典範令や各教本を勉強し、規則・規律等の遵守事項を守って当番勤務に勉強し、本科の歩兵訓練に日夜励みました。

昔の人が兵隊に行つて来たなら「一人前の男だ」というていたが、さすがにそのとおりだと思いました。このように頭は勿論、身体も鍛えたら、一般社会人としては大成して、大人物・人格者・大金持になれると思ひました。人それぞれの方向に差異はあれど、軍隊の初年兵の精神は尊いものだった、と現在も思う。

時は満州事変後の事変処理期である。管内での教育の時は良いけれど、営外訓練の時は充分に注意の上にも用心しながら、実践さながらの猛演習だった。

二か月過ぎた五月九日、大隊本部の駐屯地である鄭家屯への移動命令が出た。軍隊生活の要領も少しは解つたが鄭家屯は中隊も多く兵員も大勢だ、充分過ぎるぐらい緊張して諸勤務に服しました。

にわかには慌ただしい空気が管内に流れ出しました。五月二十一日払暁、非常召集のラッパが鳴りました。春季大討伐作戦とのことでした。私達初年兵も軍服を整えて営庭に整列しました。彰武・阜新・庫倫方面への作戦出動でした。初めて敵に向かって、銃弾を発射し、また敵弾が身体のすぐ側を飛び交つた。古年兵は平気な顔で動作をしているが、私達初年兵はみな青い顔をして身体が自然にガタガタと震えていた。

私はその時に思った。なんの怨みも憎しみも無い者同士が、なぜ戦わねばならぬのか。やらぬとやられる。殺さぬと殺される。ただそれだけのことだ。「人間も結局動物だ、弱肉強食か」第一線において私はしみじみと感じました。

六月二十二日原隊に帰営した。私の戦友の中にも数名の戦傷者が出た。七月一日付にて乗馬修業兵を命ぜ

られました。歩兵にも馬が必要な時がある。乗馬斥候や伝令等に乗馬兵が必要でした。通常勤務の上に当番勤務、その上に軍馬を一頭与えられました。並大抵の苦勞ではなかった。治安工作で蒙古遠征の時、樹一本もない見渡す限りの草原。夏季でもあり、かげろうで遠くの草原が湖に見え、近寄って行けば草原で水(逃げ水)の無いのが一番苦しかった。やっと部落に辿り着き、井戸水を貰いました。村の中に井戸が一つ有るのです。口は小さくて中は広く深い井戸で一杯水を汲むのも順番で中々でした。

布製の水囊を両手に持って帰って来ると、軍馬は動物特有の臭覚が働くのか、今まで疲れて弱っていたのに、急に元気な高い声で嘶いて水をくれと催促します。水囊は地面に置くことが出来ないで、手に提げていると一気に呑み干して、もう一方の水囊にも、あの長い顔を突き出して要求します。私達兵隊はまだ一滴も口にしていない。その残り水で兵隊が渴をいやしました。

また井戸水は良いのですが、小さい川は流れが悪く

飲んで腐ったような臭いがして飲料水に出来ず、水筒一本の湯水で一日を過ごしたことも何度も体験しました。

当時日本では、すべて軍国調で、流行歌も戦意高揚の歌でないと駄目でした。中でも愛馬進軍歌は有名でよく歌われました。その歌詞の文句のように軍馬は大切に取扱われ、人馬一体の生活でした。

一期の検閲も無事終わって、九月一日付で一等兵に進級しました。これで半人前の兵隊です。満州は冬にもれず春と秋は短く、夏は三十余度の炎熱で、冬は長く続き零下四十度にもなる。寒暖の差がはげしく、私達はすべて耐え忍んで軍務に服しました。

昭和十二年三月四日付陸軍上等兵に一選抜で進級します。ますます元気で張り切って精励しました。昭和十三年二月八日開通へ移駐のため鄭家屯を出発しました。三月一日付で伍長勤務上等兵を拝命しました。六月十日関東軍配備変更で富拉爾に移駐し、同地区整備の任につきました。同十八日より共産八路軍討伐のため、部隊編成をし、私は第二小隊第一分隊長として、昂々溪

より六月二十一日満支国境古北口を通過して、北支八路軍との戦闘作戦に出動しました。

行動は夜間秘密裡に行うことが多く、行軍中小休止すると、その場にて寝てしまふ兵士があり、分隊長としては出発時の人員確認が苦勞でした。八達嶺での戦闘は大変でした。一番の敵は飲料水の無いことでした。戦友の中には自分の小便を飲んだ者もいたそうです。公里の戦闘は急襲したために多数の敵兵が降伏しましたので、尊化収容所に移送しました。熱河省・西南付近での共産第八路軍討伐作戦は、最強の敵部隊であったためにわが軍も苦戦の連続でした。戦闘概略を書きますと左記のようです。

六月二十一日 密雲県石匣鎮付近警備

六月二十四日 熱河省興隆県六道河付近戦闘

六月二十六日 九聖廟付近戦闘参加

満支国境通過六道河着、同地区警備

七月 十七日 半壁山着同地区警備

七月二十五日 満支国境羅文峪通過

七月 三十日 河北省遵化着、石門鎮付近戦闘、引

続き下宮付近戦闘参加

八月 三日 満州国境黄崖関通過興隆着、同地区

重点警備、引き続き皇松峪付近戦闘参加

八月三十一日 満支国境羅文峪通過、遵化着

九月 四日 気房庄付近戦闘参加、引き続き東照蒸

州付近戦闘参加、引き続き三十嶺付近戦闘参加

九月 九日 遵化着同地区警備

九月二十三日 松浦大尉による将校斥候に出動。

全員乗馬特業を受けた兵十一名、通訳一名計十三名の乗馬斥候である。豊順まで十五キロ。途中の集落は反日・抗日分子が多く住み、要注意だった。豊順の第四百一十部隊に無事に到着。当夜はお世話になり、手足を延ばしてグッスリと眠った。翌朝帰路に着く途中、山峡入口にて八路軍に遭遇しました。敵は驚いて馬や荷物を積んだロバ等を置き去りにして山の方へ逃げて登って行きました。私達は先発の乗馬隊で、さらに後続に大部隊が来ると思っていたの逃亡だと思います。

松浦隊長も、この地に長居は無用だと反対側の山を越えようと帰隊出来ると判断されて、その山を登り切っ

た。とその時敵の銃声が激しく聞こえ出しました。わが軍を小部隊と見て敵の攻撃が一段と激しくなりました。山道のため行進もままならず、上等兵が一人腹部に重傷を受け、軍馬も二頭が倒れました。私と四名が稜線上にて敵に抗戦しました。擲弾筒は威力も強く敵の一番怖れる兵器です。頭上をヒュル、ヒュルと鳴って弾が飛んでくると一目散に逃げ出します。負傷兵の応急手当をして軍馬も谷間に降ろしました。私達五名もそれを確認して下山しました。

また敵の銃撃が一層激しくなりました。ポプラ林を走っている、頭上からポプラの葉がバラバラと落ちて来ました。三百メートルほど行ったら、幅五十メートルぐらいの川岸に出ました。一頭の馬が泥沼に脚を踏み入れて、一寸も動くことが出来なくなり、その兵は一生懸命に助け出そうとするが、ますます深みに入って行きます。万事休す。隊長は軍馬を見捨てて帰れと命令されました。これで馬なしの兵隊は三名になりましたが、皆健脚揃いで頑張って走りました。

渡河後十五分ほど過ぎたころに突然後方から馬の駆

けて来る音がします。みればあの泥沼に置き去りにした軍馬が全身泥まみれにして自力でもがき苦しみ跳ね返り、這い出して来たのでしよう。耳も震も泥まみれです。その馬の乗馬兵は首に抱きつき涙を流しながら無事に帰って来たことを大声を出して喜んでいました。傍で見ているとその心情が充分解ります。

大変な廻り道をしましたが、それだけ多くの敵の状況が把握出来ました。一名の戦傷と、軍馬二頭の死亡は大きな損失でした。

帰隊後、松浦大尉から全員よくやったとお言葉を頂戴したことが今も鮮明に頭にあります。またこの斥候任務が一番心に残る事柄でした。その後

九月二十九日 馬庄河付近の戦闘参加。引続き飯依

營付近の戦闘参加。

十月 四日 揚家哈付近戦闘参加、引き続き大太

平庄付近戦闘参加、公里付近戦闘参

加。

十月二十三日 馬相宮付近戦闘参加。

十一月 二日 滿支国境の羅文峪を通過、興隆県平

壁山に到着。

同 四日 茨山東方高地の戦闘に参加。

この戦闘は第一中隊が大打撃を受けて戦死者も出ました。敵は八路軍でした。指揮は蔣介石の元参謀の揚二（ヤンアール）が陣頭に立っていたとのことでした。

茨山から敵が降りてきた。その時我が第二中隊の機関銃が一斉射撃を行い、敵は戦意なく全員降伏しました。昨日の一中隊の仇討をしました。揚二参謀は被弾死亡し、少し高い処に遺体が置かれ、降伏した敵兵から、中隊長が揚二参謀に相違なきことを確認された。

十一月三十日、三道溝東方高地付近の戦闘に参加。翌、昭和十四年一月二十三日まで遵化付近の警備の任につき、一月二十九日密雲県古北口の駐屯地に帰着しました。隊長より「戦陣の泥を洗い流して少し休養せよ」の訓示あり、改めて昨日までのことを回想しました。

北行しました南進し、広大な満州平野の果てしなき広さ、大平原に沈む太陽が真っ赤に燃えてその大きいことが今も脳裏に明瞭に焼きついています。そして何十

回と戦闘を行ったことでしょう。何度となく移動を繰り返し、その都度軍馬と共に大草原を走りまた急峻な山岳を手綱を引いて登り降りしたことでしょう。言葉の無い軍馬でも苦しい時は、あの大きな眼に泪を一杯ためていました。最後に別れる時は、まるで肉親と別れるような一種異様な寂莫の気持ちになりました。

昭和十四年三月八日歩兵伍長に任官し、三月九日現役満期になり除隊しました。内地帰還者は日本上陸後解散という事で、営門で在営の戦友に見送られて「貴様達も元気で無事に帰ってこいよ」と声を残して、古北口より汽車で出発しました。皮肉なことに彼等は、それから間もなく、昭和十四年五月十二日のノモンハン事件で多くの犠牲者が出たそうです。

大連で乗船、出航し、一路日本目指して船は進みました。三年間の大陸に別れる気持ちより心は、はや故郷の山や川に思いが走っていました。大時化の海は船が横波で左右に大きく揺れ翻弄されますが、本土が見えた時はヤレヤレと安堵感で一杯でした。

呉港に入港、第一步を印したのは昭和十四年三月十

四日でした。似島検疫所にて検査を受けて、即時部隊解散でした。家族が出迎えに来ている者は皆いそいそと帰って行きました。が残った者は「このまま別れるのは淋しい」と広島の前前の旅館に一泊して終夜酒を飲み、語り明かし、翌朝列車に乗り故郷へ出発しました。

昨夜は第一・第二中隊と一緒でした。皆同年兵ですから存分に別れを惜しみ、私と同行者は一中隊二名、二中隊二名の四名です。途中で一人降り、また一人降りて播州赤穂の駅には四名で帰りました。

昨日広島から電報を打っていましたから多数の皆様の中から出迎えを受けました。日夜、日支戦争の高まる時で、出征の時は母や妹は柱の陰にそっと隠れるようにしておりましたが、今日は満面に笑みを浮かべて迎えてくれました。翌日は先祖の墓参りと氏神様への凱旋報告の参拝を行い、近隣の家々にお礼の挨拶廻りをしました。

隣町の相生にある播磨造船所から入社せよと迎えられ、即入社しました。会社は主に貨物船の新造や補修

を行っていました。会社では私の兵役免除の手続きを取ってくれました。そのためか再度の軍隊生活はなしで、戦後まで造船所勤務でした。

戦時色はますます濃くなり、国家総動員令・国民徴用令等々で、一人の遊ぶ人もなく皆働きました。会社にも徴用軍属の人が逐次入社して来ました。

勤務時間は朝七時から夕五時ですが、私は何日も二三時間の残業でした。多くの人達は毎日深夜残業でした。通勤は赤穂から自転車に乗って高取峠（約百五十メートル）を越えて十二キロの砂利道を一生懸命ペダルを踏んで行きました。帰路は深夜灯火のない山道です。でもいくら疲れても軍隊のことを思えば案外のものでした。これも昭和二十年の二月に相生に転宅しましたから、それからは楽になりました。

造船所が空襲されたこともあります。かくして八月十五日、天皇陛下の詔勅を拝した時は全身の力が抜けてその場に座り込みました。

実弟が国のためと一心に働いて来たのに昭和二十二年十二月十六日ビルマのラングーンで刑場の露と消え

ました。全戦没英霊の冥福を祈ります。合掌。